

アオバト 英: Japanese Green Pigeon 学: *Treron sieboldii*

## 1. 分類と形態

分類: ハト目 ハト科

|     |            |            |                 |
|-----|------------|------------|-----------------|
| 全長  | 315-348mm  |            |                 |
| 翼長  | ♂183-196mm | ♀177-187mm | ♂juv. 172-186mm |
| 尾長  | ♂109-133mm | ♀103-123mm | ♂juv. 100-105mm |
| 嘴峰長 | 18-21mm    |            | ♂juv. 20mm      |
| ふ蹠長 | 24-28mm    |            | ♂juv. 20-27mm   |
| 体重  | 217-300g   |            |                 |

\*全長は榎本 1941, 他の成鳥は清棲 1978, 幼鳥(約1.5~2ヶ月齢)はこまたん 2004bによる。

## 羽色:

雌雄ほぼ同色。オスでは額と喉から胸は緑黄色ないし黄色で、オレンジの強い個体もいる。頭頂から背は暗緑色。中・小雨覆は赤紫で、大雨覆は緑褐色。腹からの体下面は淡い黄白色で、下尾筒は長く幅広い緑灰色の軸斑がある。メスは額と喉から胸はオスに比べて緑色が強く、中・小雨覆に赤紫色はない。雌雄とも嘴は水色で柔かい。足はピンク。虹彩は外側が赤く、内側が青い(写真1)。また落鳥した成鳥オスの羽根は尾羽14枚を含む4,715枚であった(こまたん 2004a)。



写真1.  
成鳥オス  
(左)と成鳥メ  
ス(右)。

幼鳥は大雨覆の先端と次列風切の先端に淡黄色の部分が目立ち、2本ないし3本の白い帯に見える(写真2)。巣立ち後、しばらくして照ヶ崎に飛来する幼鳥は成鳥に比べて体全体が小さく、次列風切羽の翼の幅が狭く、尾羽も成鳥に比べ短く飛翔時にも認識できる。いくぶん成長した幼鳥のオスでは雨覆が2~3本の赤紫の部分帯またはまだら模様に見える。その頃には嘴も体の大きさも成鳥に近くなる。幼鳥の嘴は先端の一部あるいは全部がピンク色。



写真2. 幼鳥オス。

## 鳴き声:

繁殖期によく聞かれ「オーアオー、アーアアー、オーアオー」と尺八あるいはヨーデル(ファルセット)のような声で鳴く。この声には高い声と低い声の2種類がある。また、早口でつぶやくように「ポポポポ...」、「ポーポッポッポッポ...」また「ココココココッ」と鳴く(こまたん 2003a)。神奈川では「オーオー ゴアッオー、オー、オー、オーアオ、オーアオ、アーアアーオ、オーアアー、アーアオオ、オーアオ、オー」がフルフレーズで、野外で距離が離れると前奏部分の「オーオー ゴアッオー」は聞き取れない。

## 2. 分布と生息環境

## 分布:

ロシア(サハリン南部)、日本(国後島を含む北海道から九州)、中国南東部、台湾、ベトナム北部に分布する。記

録は大隅諸島、琉球諸島(奄美大島から沖縄島、西表島)、伊豆諸島、小笠原諸島にもある。アオバト属の中で最も北まで分布している(中村 1980)。基亜種(*T. s. sieboldii*)は日本の固有亜種と考えられる(こまたん 2004a, 清棲 1978, Gibbs 2001)。

## 生息環境:

丘陵地から山地の林に生息する森林性の鳥である。地上では開けた場所に出ることは少ないが、初夏から秋にかけて海岸で群をなして海水を飲む習性がある。本州以南では繁殖期には主に落葉広葉樹林に生息するが、北海道の落葉広葉樹林では少ない(藤巻 1999)。

## 3. 生活史



## 繁殖システム:

丹沢山地(神奈川県)の観察では5月中旬から9月中旬の4か月が繁殖期であり、1シーズンに2回の繁殖も可能と考えられる。渡来した4月中旬から5月初旬にかけ、群れで行動し、求愛行動と思われる「ポポポポ...」鳴きや尾羽を上下に振ったり、首を左右に振る求愛行動が5月中見られる。6月の後半にも「ポポポポ...」の鳴き声が聴かれ(こまたん 2003a)、2回目の繁殖が示唆される。

## 巣:

丹沢山地の観察では、巣は樹高18m、幹の胸高の直径28cmのイヌシデの高さ12mの二股に分かれサルナシの蔓が絡んだ所に造られていた(写真3)。巣は細い小枝が積み重ねられた底の浅い直径約25cmの皿状であった(こまたん 2003a)。巣は見つけるのが非常に難しく、国内の確実な営巣の記録は多くない。



写真3. 架巣場所。

## 卵:

一腹2卵で、卵の殻は乳白色で無斑(長径29.0-34.5mm × 短径21.0-27.4mm)(清棲 1978)。

## 抱卵, 育雛期間:

丹沢山地での記録から抱卵期、育雛期とも各約15日と考えられる。雄雌とも抱卵、育雛する。日中の抱卵はオスが多く、メスは早朝には巣に居ることが多かった。抱卵の雌雄の交代は連続的であるが、巣立ち間際には離巢時間が30分の日もあった。

ハト類の育雛の特徴であるピジョンミルク(嗉囊乳)を、ヒナや幼鳥は親鳥の口に頭を入れて摂取する。親鳥は雌雄とも嗉囊乳を与える。また、照ヶ崎での記録から巣立ち後直ぐに海岸には行かず、巣立ち日から約25日以降に照ヶ崎に飛来すると思われる。

## 渡り:

日本では国後島を含む北海道から九州で繁殖し、北部の個体群は冬に南へ移動する。冬期、北海道での観察例もあるが希である(こまたん 2004a)。

## 4. 食性と採食行動

植物質を主食とし、主に樹冠部で採食するが非繁殖期(冬期)には、地上や樹上でドングリを採食すること多い(写真4)。繁殖期には主に液果を採食するが、結実前には新芽、蕾や花などを食べる。液果を食べた場合、種子は消化されず排泄されるため、植物の種子散布に貢献している。しかし冬期の餌のドングリでは、種子は消化されるため種子散布に貢献しない(佐々木1986, こまたん1996, 2004a, 2005)。



写真4.  
非繁殖期のドングリ地上採餌(京都御苑)。

## 5. 興味深い生態や行動、保護上の課題

### ● 海水の吸飲行動

北海道小樽市張碓や神奈川県大磯町照ヶ崎、静岡県浜名湖などで、繁殖期に海水を飲む事で有名であるが、海水吸飲の他、北海道美瑛町、秋田県田沢湖町玉川、群馬県上野村、福井県大野市などでは鉱泉水、温泉水の吸飲が観察されている。他のハト類やフラミンゴ類と同様に下を向いたまま鼻孔も水につけて飲むことができる。なお非繁殖期の海水吸飲の記録は無い。

繁殖期は警戒心が非常に強く、森林内での観察は容易ではない。しかし、海岸、特に照ヶ崎では、アオバトに注意していない人の近くまで降り立つこともある。それでも何羽かは周りを監視している事から警戒心を解いているわけではないので、観察や撮影には節度を持って当たりたい。

海水(塩水)吸飲は、体内のNa-Kバランス(山田常雄ほか1991)をとり体液の浸透圧維持のためとの仮説が有力に思われる。昆虫食をしないアオバトの主食はカリウムを多く含む果実であり、そのため海水吸飲によるナトリウム摂取を行っていると言明されるが、生理学的な実証は今後の課題である(こまたん・加藤2007)。また、照ヶ崎では毎年高波にのまれるが、生命の危険を冒して行われる海水吸飲は、生死に関わる重要な生理的行動であると思われる。

### ● 人との関わり・狩猟鳥の歴史

人との関わりでは、アオバトには食用乱獲の歴史がある。かつて山野に相当数いた鳥で美味な上、簡単に捕獲できたこともあり、1947年の法改正まで狩猟対象鳥だった。「アオバトは単独で木にとまっている時は警戒心が強く、狙い難い。撃ち損じたら絶対に戻ってこないが、群集すると警戒心が極端に粗漫になる傾向がある」(川口1937)、「(アオバトは)中国関西方面にては肉味なるがため秋季の獲物として多数店頭飾られる」(和田1926)という記録があり、食用目的に捕獲・流通がなされてきた。過去に多くのアオバトが捕獲されていたと考えられ、北米のリョコウバトのように人による乱獲で絶滅が危惧されたことは記憶されて良い(佐々木1986, こまたん2004a)。現在IUCNのレッドリストでは軽度懸念(LC:Least Concern)だが、乱獲や生息地破壊によりその数を大きく減らしたと考えられ、これ以上

の悪化は避けなければならない。

神奈川でのアオバトの保護には繁殖地である丹沢山地、海水吸飲地である照ヶ崎、それらを結ぶ中間緑地帯である大磯・平塚西部丘陵の環境保護が大切である。特にこれまで注目されていない中間緑地帯は移動経路の他、採食や繁殖期の塹としても利用されていることから、山岳地から丘陵、海岸まで面として地域一体の環境保全が重要になる。更に冬期には西日本へ移動し、市街地の神社や都市公園での越冬が知られるが、宮崎県など大磯、京都御苑以外の越冬地の状況は分かっておらず調査を含めた環境保護活動が必要である(こまたん2003b, 2005, 2007)。

## 6. 引用・参考文献

- Gibbs, D., Barnes, E. & Cox, J. 2001. Pigeons and Doves. A Guide to the Pigeons and Doves of the World. 454-455. Pica Press. UK.
- 榎本佳樹. 1941. 日本産鳥類の体の大きさ. 日本野鳥の会大阪. 大阪.
- 川口孫治郎. 1937. 日本鳥類生態学資料. pp.230-247. 集林書房, 東京.
- 清棲幸保. 1978. 日本鳥類大図鑑・増補新訂版. 講談社. 東京.
- こまたん. 1996. アオバトの糞から検出された植物種子. BINOS 3:1-8.
- こまたん. 2003a. 丹沢山地堂平におけるアオバトの繁殖調査. BINOS 10:1-17.
- こまたん. 2003b. 大磯町西部虫窪地区における冬季のアオバトの観察記録. BINOS 10:99-108.
- こまたん. 2004a. アオバトのふしぎ.HSK, 埼玉.
- こまたん. 2004b. 大磯町照ヶ崎海岸におけるアオバトの幼鳥観察. BINOS 11:1-6.
- こまたん. 2005. 京都御苑のアオバト-2004年秋~2005年春-. BINOS 12:7-35.
- こまたん. 2007. 大磯町照ヶ崎海岸付近の森で泊まるアオバトの確認. BINOS 14:1-13.
- こまたん・加藤千晴. 2007. 神奈川県自然環境保全センターに保護されたアオバトの観察記録2例, 果実食と塩分補給・消化器官の比較について. BINOS 14:15-30.
- 佐々木勇. 1986. あおばと. 自費出版, 札幌.
- 中村一恵. 1980. 神奈川の鳥類相. 日本野鳥の会神奈川支部編神奈川の野鳥. 有隣堂, 横浜.
- 藤巻裕蔵. 1999. 北海道中部・南東部におけるキジバトとアオバトの生息状況. STRIX 17:15-23.
- 山田常雄, 前川文夫, 江上不二夫, 八杉竜一, 小関治男, 古谷雅樹, 日高敏隆 編集. 1991. 岩波生物学辞典 第3版. 岩波書店, 東京.
- 和田干蔵. 1926. 青森県叢書 全集日本動物誌. 講談社, 東京.

## 執筆者

こまたん

大坂英樹, 金子典芳, 斎藤常實, 田端裕

こまたんは「野鳥を中心に、花や昆虫などを愛でる平塚市・大磯町をフィールドに持つアマチュア・バードウォッチングのグループ」で、初心者に優しく、なんでも楽しみながら、非接触型で自然観察・調査・保護の活動を行う。会則/会費/代表無し。1983年8月に「ハイツ探鳥会」の名称で月一回の探鳥会が開始され、第6回から「こま探鳥会」、第7回目頃から「こまたん」の愛称が登場。2011年8月には第336回を数える。その間、論文を10本発表し、書籍2冊を上梓。



大坂.



斎藤(左)-金子(右).



シーボルトが日本から運んだタイプ標本と田端(オランダ国立自然史博物館)。